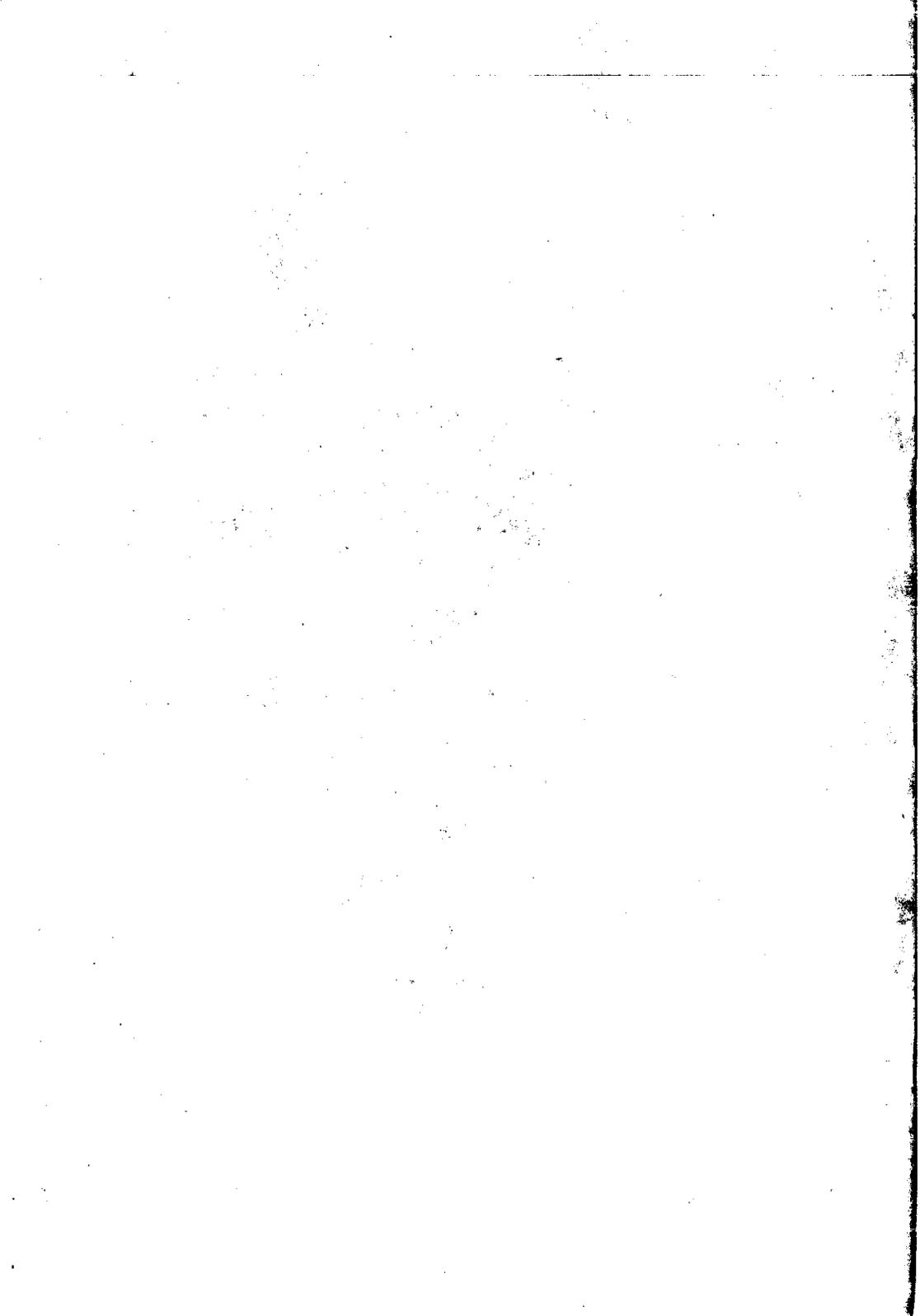


明治四十五年四月

史學  
研究會  
講演集  
第四冊

東京  
合資  
會社  
富山房發行



史學研究會講演集第四冊



目次

保物語考

文學博士 上田

田

敏

一頁

印度史研究資料に就いて

文學博士 松本文三郎 九三

元祿時代の京都小説家

文學士 藤井乙男 一五四

儒佛道三教葛藤史研究資料

文學博士 高瀬武次郎 一九二

鎌倉時代の布教と當時の交通

文學博士 原勝郎 二九九

西魏の四面像に就いて……………

文學士濱田耕作……………二七七

雜錄

因幡國網代の正平古鐘……………湯本文彦……………二九九

本會記事……………三〇五

挿圖

口繪 西魏四面像正面……………對頁

第一圖 同上右側面及左側面……………二七六

第二圖 同上背面……………二七六

第三圖 同上刻銘……………二七六

第四圖 因幡國網代村梵鐘銘文……………三九六

# 伊曾保物語考



上 田 敏

“So the tales were told ages before Æsop; and asses under lion’s manes roared in Hebrew; and sly foxes flattered in Etruscan; and wolves in sheep’s clothing gnashed their teeth in Sanskrit, no doubt.”—Thackeray, *The Newcomes*.

伊曾保の動物譬喩談に接したのは、幼年の頃、當時の小學讀  
みで「狼來れり」の話に戒められ、鶴と狼との馳走談には、笑ま

されたのが始であつて、やゝ長じて、英文の喩言集などを繙くに至つて、益、これに對する興味を深く感じたが、其後、年を経て一日、東京帝國大學の書庫中に、日本學者を以て名ある英國外交家サトウ氏(今のサア・アアネスト)の撰にかゝる日本耶蘇會刊行書解題を見出して、文祿二年天草の耶蘇會學林板刻、羅馬字綴、日本俗語譯伊曾保喩言集あるを始めて知り、又殆ど同時に東京高等師範學校の書庫に藏する寛永十六年刊本『伊曾保物語』三卷を通讀する事あつて以來、伊曾保が喩言集の由來流布等について聊か考證を重ねて見たくなり、先年海外觀光の途に上つた時も、實は大英博物館珍藏の文祿本について取調べてみたいといふ下心もあつたのだが、旅中閑を得ず、ついでを果さなかつた。然るに昨四十三年中、新村博士は、かの文

本を親しく手寫されたものを基として、之を國字に書改め、雜誌「藝文」に譯載し、極めて有益な文獻史料を提供された爲、忘れらるゝも無く打棄てゝ置いた伊曾保の事がまたまた念頭に浮び、そのまゝこれを以て今日講演の材とする。精細の考證に至つてはもとより他に希臘羅甸古典學者また印度學者を煩はさねばならぬ、さなくとも又別に一篇の長論文を要するから、今は唯研究の筋道と結論の一端を談るばかりである。

## 二

一體、伊曾保物語の原本は何であるといふ問は手輕に答へられさうで、實はさう容易に濟まされない。世界の近世語で、あゝも汎く流布してゐる此書の由來はどういふのだらう。

これがもしサッフオの抒情詩、エルギリウスの叙事詩といふのならば、すぐ其原本を指して最古の現存寫本までも定められる、或は又『千一夜物語』のやうな書であつても、これが流布本の源であると決定されるが、伊曾保の喩言はさう簡短に原本を定めてしまはれない。 *Aesop's Fables* 伊曾保の譬喩談といふよりは、寧ろ *Aesopic Fables* 伊曾保ぶりの譬喩談とする方が適當なくらゐで、今日西洋に残つてゐる殆ど凡へての譬喩談は、いづれかの集中に收められて、伊曾保の名の下に隠れたもので、種々の英文伊曾保物語を調べてみると、喩言の數七百種に上るといふ。現に *I/Esrange* の集のみでも、五百有餘の喩言を收めてゐる。尤も伊曾保が希臘人であるといふ所から、中世以來傳はつてゐる希臘散文の喩言集を以て原本であらうと

推測する者もあらうが、實際について比較してみると、喩言の文も數も大に相異してゐることに氣がつかう。そこでまづ近世歐羅巴語で刊行された伊曾保物語を調べて、とりあへず其原本は何だらうと前へ遡つて行くと、一四八〇年 Heinrich Stainlowel の羅甸及び獨逸語の集が、近世語伊曾保物語の根元である事を發見する。時宛も印刷術發明の世であつたから、有名なる英人 Caxton は里昂の僧 Jules Machault の佛譯を通じてスタインヘエルの原本を重譯し一四八四年之を刊行した。後英國で刊行されたレストレンジ等の諸集も皆此カクストン本に據つたので、唯スタインヘエルの後に現はれた希臘語喩言集から多少の増補を加へたに過ぎない。獨逸でも一四八〇年本が其後の諸集の基礎となつて Brandt, Waldis

が之に多少の追加を試み、佛蘭西では後 Lafontaine が之に Bidpai 其他の東洋噺言集から増補したものが汎く行はれ、伊太利亞には一四八五年の Tippo 譯、西班牙には一四九六年の Infante Henrique 譯、和蘭陀には一四九〇年佛譯からの重譯が坊間流布本の源となつてゐる。

### 三

さてかの羅甸及び獨逸の原本は下の六部に分れてゐる。

(一) 十三世紀東羅馬の學僧 Planudes の著と傳ふる伊曾保傳

(二) Romulus と號する噺言集

(三) Fabulae Extravagantes といふ動物噺言

(四) 希臘散文噺言集拔萃

(五) Avianus 噺言集拔萃

(六) 十二世紀初葉西班牙在住の猶太人 Petrus Alphonsus

編 *Disciplina clericalis* 及び十五世紀伊太利亞人 Poggio Bracciolini 編 *Facetiae* 以上一書拔萃

而してこの第二の Romulus は全集の重要部を占めてゐる四卷の噺言集であるが、これを研究して行けば近世の集から遡つて、中世の噺言が如何なるものであるかゞ解る。此事に就いては前世紀の初佛人 Robert がラフンテエヌ噺言集の序論に研究を始め、續いて Edéstand du Ménil が *Histoire de la fable ésoopique* (1854) になほ考證を進めたが、Léopold Hervieux の大著 *Les fabulistes Latins* (1884) が多年に亙つて最も精密な攷究を凝してゐる。ま

た獨人 Hermann Oesterley—Romulus (1870) が手に入り易く且つ信憑すべき書である。是等の學者が研究した所及び其刊行にかゝるロムルスの異本について調べてみると、此ロムルスの喩言集の寫本にはざつと次に擧げる三種の系統がある。

(一) Romulus 集。喩言八十三、普通之を四卷に別つ。最古の寫本は大英博物館藏、十世紀の筆蹟。

(二) *Risopus ad Rufum* 或は畧して *Rufus* 集。喩言八十二。此寫本前は *Wisseburg*。今は *Wolfenbittel* にある。

(三) *Anonymus Nilanti* 集。一七〇九年 *Nilant* 之を刊行した故、此名がある。喩言六十七。後の研究にて十一世紀の人 *Ademar de Chabannes* の編と定まり、*Ademar* 集ともいふ。

此他なほ多少の變化ある異本數種はあるが、皆上述三系統の  
どれかに屬してゐる。而して此三者は中世噺言集の根元に  
對して三段の階梯をなしてゐるので、アドマル集が最も源泉  
に近く、ルウフス集之に次ぎ、ロムルス集が最も遠ざかつてゐ  
る。而してこの源泉とは何ぞと研究してみると、奚ぞ知らむ、  
かの有名なる羅匈短<sup>テ</sup>長<sup>ス</sup>律 Phaedrus 噺言集ならむとは。要する  
に中世の散文噺言集はフアイドルスの轉訛である。随つて今  
日の所謂伊曾保物語はフアイドルスに多少の増補を加へたも  
のである。

#### 四

紀元一世紀の希臘人フアイドルスの著は近き數世紀間羅匈

語練修の讀本として廣く行はれてゐるが、エルギリウス、オキデ、ウスはたホメエロス等の古典の如く中世を通じて近代迄久しく傳唱されたのでは無い。中世の久しき間其羅旬短長律はいつしか散文の如く取扱はれ、著者の名に至つては四五世紀の頃から十五世紀まで殆ど全く湮滅して了つたのは、學界の一奇事である。現存古寫本五種の中、Pithoeanus, Remensis は九世紀 Codex Danielis は十一世紀 Perottinus 及び其複本 Vaticanus は十五、十六世紀の筆寫であるが、此書の初刊本は十六世紀の末年になつて、やつと公にされたので、實に一五九六年九月の板である。(L. Hervieux—Les fabulistes latins. t. i.; Robinson Ellis—The Fables of Phaedrus 參照)

このフイドルス初版刊行本の編者佛國トロアの狀師 Pierre

Pithou は一五九五年其弟フランソアから寫本を送られて、直に其眞價を認め、大に喜んで之を鉛塹に付した。此初板本は今稀靚書である。所謂ヨ―版七十頁の小冊子で其扉には Phœdri Avg. liberti fabvlarvm *Æsopiarvm libri v, Nunc primum in lucem editi. Avgvstobonæ Tricassivm excvdebat Io. Odolivs, Typographeus Regivs, Anno MD. MDXCVI. Cum privilegio.* とあつて、第三頁には弟フランソアに對する感謝を表はした小引がある。Quicui vero ille alapas et libertatem debuerit, tibi certe, frater, jam vitam debet, quam temporum injuria prene sepulto exemplaris a te reperi beneficio restituere conatus sum といふやうな文で、久しく湮滅してゐたこの諭言集が、君の發見した寫本の庇蔭で、今再び世に出ることゝなり、予はこの珍品に據つて、之を復活させる事に勉めたとある。其頃羅馬に

集つてゐた當時の學者たちは、暫時のほど、あまり立派な大發見であるから、少し疑を挿んでゐたが、終に大喝采を以て此書の復活を迎へたといふ。こゝで直ぐに知りたいのは、此寫本の出處であるが、不幸にして確な事が解らない。唯僅にピト、ウ板卷尾の註に *net. ex. Cat.* とあるばかり、多分これは *Orelli* の推測する如く *netus exemplar Catalaunense* 即ち *Châlons-sur-Marne* 古寫本或は *Catacaense* 即ち *Donai* 古寫本のつもりであつて、*S. Benoît-sur-Loire* 僧院の藏であつたといふ一派の説は誤である。

## 五

さてかくの如く永い間湮滅してゐたフイドルス噺言集が、どうして中世の散文噺言集の源泉であるかといふに、この二

者共通の喩言を比較して見ると解る。まづ最も古るさうなアドマル集を調べると、喩言六十七種のうち、三十七種は普通行はれるフ、イドルスに現はれるて、而も文章まで殆ど一致してゐる。唯散文に書改める爲め少し變更したばかりだ。然るにルウフス集は其變更の程度が稍大きく、ロムルス集も亦頗る變つてゐる。然し後の二者とても、正しくフ、イドルスの羅旬短長律を散文に書直したのである事は疑無い。一例として各共有してゐる狼と鶴との話を擧げてみる。

(1) Phaedrus—Fab. VIII.—LUPVS et GRVIS.

Qui pretium meriti ab improbis desiderat,

Bis peccat : primum, quoniam indignos adiuvat ;

Impune abire deinde quia iam non potest.

Os devoratum fauce quum hæreret lupi,  
Magno dolore victus, coepit singulos  
Inlicere pretio, ut illud extraherent malum.

\* \* \* \* \*

(Attendre des méchants la récompense d'un bienfait, c'est double faute: d'abord, on a obligé des indignes; ensuite, on risque de ne pas s'en tirer sain et sauf. Un loup avala un os qui lui resta dans le gosier. Vaincu par la douleur, il demandait secours, promettant une récompense à qui le délivrerait de son mal).

(2) Ademar.—LXIV (Lupus et Gruis)

Qui pretium meriti ab improbo desiderat

*plus peccat: primum quod indignos \*\*juvat  
importune, deinde quia ingratus postulat quod implere non possit.*

*Lupus, osse devorato fauce inhaeso,  
Magno dolore victus coepit singulos  
promissionibus et praemio deprecari ut illud extraheretur malum.*

\* \* \* \* \*

(3) Rufus.—IX.—*Qui benefacere uoluerit malis satis peccat.*

*Ossa lupus cum devoraret, unusm ex illis adhesit in faucibus eius  
transuersusm graviter haesit. Inuitat magno pretio lupus qui extraheret  
malum.....*

(4) Romulus.—VIII.—Qui cumque malo vult bene facere satis peccat. *De quo simili audi fabulam.*

Ossa lupus cum devoraret, unum ex illis hesit ei in faucibus trans-  
*versum graviter. Invenit lupus magno pretio qui eum extraheret malum.*

以上の比較文例第二、第三、第四中、根源フ、イドルスと相異なる點を明にするため、そこだけ伊太利亞字で印刷したから、目して中世噺言集の轉訛を見ることが出來よう。またアドマル集の文は元來散文體に書寫してあるのだが、便利の爲め、律語體に行を別けて寫した。一體ピト<sup>ッ</sup>ウ板の原寫本も、實は恰も散文である如く行を別けずに筆寫してあつたので、中世の筆耕が或は其羅匈短長律であるのを知らずに轉寫したのかも知れぬ。とにかく以上の比較に依つて中世の噺言集が

實はフアイドルスの轉訛に過ぎぬ事が首肯される。

## 六

然しこゝに注意す可きは、中世噺言集中の話で、普通のフアイドルス中に出てゐないのがある事である。是等の話は羅匈原本以外の集から竄入したのであるか、それとも又今傳はつてゐるフアイドルス本は不完全なものであつて、中世の人は、もつと話の數が多い原本に據つたのであらうか。此疑問は判然と定めにくい、が、まづ後の方の説が正しいやうだ。何となれば、アドマル集中、普通のフアイドルスに見えてゐない話もあるが、よく其文體律語等を調べて行くと、確にフアイドルスの風があるのみならず、羅匈短長律の痕跡さへ著しく見える。其

上またフ、イドルス古寫本の一種例へば Perrotinus 本などには、普通本に無い喩言が三十二種もあつて、其中「猿と狐」「ユノオ、エヌス及び鷄」「エペソの後家」「羊と鳥」等は現にロムルス集中に在る、其上近世の學者が博渉して蒐集した羅甸律語の喩言を加へると、つまり中世散文喩言三大集にある九十六種の話全體は、フ、イドルス或はフ、イドルスぶりの律語と符合するのである。細い點に及ぶとなほ種々の議論はあるが、大體に於てロムルスがフ、イドルスの轉訛たることは疑無い。

## 七

羅甸文學は多く希臘に原型を有つてゐる。且つフ、イドルス自身も希臘の喩言から材料を得たと明言してゐるし、又ス

タインヘエエル本に關する上記表中第五とした四世紀の人  
アキアヌスの喩言集にも作者が希臘本に據つたと述べてゐ  
るから (Robinson Ellis—Fables of Avianus. 1887 參照) これより一步を  
進めて、フイドルス、アキアヌスの原本を探さう。然るに此穿  
鑿も一見して頗る容易なるやうで、而も前にも述べた如く困  
難である。成程、伊曾保の名を冠した希臘喩言集は、十五世紀  
以降十九世紀迄 Accursius, Stephanus, Nevelet, Heusinger, Furia, Coraes,  
Schneider 等七種もあるが、叮嚀に研究してゆくと、直に其古書  
たるに疑を挿むやうになる。之をいち早く看破したのは英  
人ベントレエの爛眼であつて、かのプラヌデエスの編及び子  
ゼレト、ス編の喩言集を讀んで、直に前者には希伯來語法、中世  
希臘語の使用を發見し、また後者はやゝ古いやうだが、それで

も舊約書約百記(一一二)の文章が竄入してあるのを突止めた。しかして二書ともに *Babrius* 或は *Gabrius* といふ著書を引用してゐる事が解つて來たから、其後の學者は力を盡して、このバブリウス原本を發見しようとした。

然るにベントレエ以後二世紀間の穿鑿は終に一八四〇年に至つて成功を見た。佛蘭西文部大臣の囑託を受けて希臘人 *Minoides Menas* は故國アトス山上の修道院聖ラウラ寺の庫裡で百二十三種の喩言集バブリウスの名ある古寫本を發見して、一八四四年始めて之を巴里に刊行し、久しく期待された古代の好著を公にした。

學者これより専心に研究を重ねて、バブリウスの生國、年代等を決定したが、*Otto Crusius* 次に *Rutherford* 等の說に據れば、不

思議にも此著者は希臘人でなく三世紀頃の羅馬人であつたらしい。してみると羅甸短<sup>+</sup>長<sup>+</sup>律<sup>+</sup>喻<sup>+</sup>言<sup>+</sup>集の撰者フアイドルスが希臘人、希臘律語の喻言集の撰者バブリウスが羅馬人といふ奇觀を呈してゐる。

## 八

フアイドルスの律語がロムルスの散文に轉訛した如く、バブリウスの律語は中世の希臘散文に變化した。而してフアイドルス原本の一部は中世の間久しく影を潜めてやうやく近世に現はれ、バブリウス原本の一部は四世紀の頃羅甸のアキアヌス集に現はれ、早く中世以降の喻言集に入つた。それで所謂希臘散文喻言四百有餘種中、大凡三百種までは、つまりバブ

リウスに起源を求められ、餘の一百種は中世僧侶の新作、或は Bidpai, Syntipas 等東洋噺言集から來たのである。スタインへ エエル本中第四希臘散文噺言集拔萃は、實の所直接に希臘語から拔萃したのでは無い、伊太利亞の學者 Ranutio d'Arezzo が、まだ希臘散文噺言集の刊行されぬうち、一寫本から百種を選んで羅甸語に翻譯し一四七六年に刊行した書からして、スタインへエエルは拔萃したのである。俗に此書を Remicinus といふのは、中世の筆寫書法では Renucius の nut と mie は頗る紛れ易いから誤寫したのである。

## 九

歐洲の噺言集中、完全とまで行かぬとも、まづ原形を存して

ある古い文献は、一世紀フアイドルス、三世紀バブリウスの集より他に無い。これより古く遡れば希臘羅馬諸家の書に散見する一々の喩言を拾はねばならぬ。今希臘盛期の文學から古代希臘の喩言と見る可きものを拔出してみると、ざつと左の如くなる。(Joseph Jacobs 研究に據る)

- 一 フロメエラ鳥 — Hesiod (Op. et Dies, 203.)
- 二 狐と猿 — Archilochus (Ammonius, ch. 6)
- 三 鷺と狐 — Archilochus (ap. Furia, p. ccciv)
- 四 笛吹漁夫となる — Herodotus (i. 141)
- 五 鷺と矢 — Kischylus (ap. Schol. on Aristoph. Aves, 808)
- 六 羊と狗 — Xenophon (Mem. II. vii. 13)
- 七 馬と狩人と鹿 — Stesichorus (Aristotle, Rhetoric II. xx)

- 八 狐と狸と扁蟲 — Æsop (Aristotle, Rhetoric II. xx)
- 九 鷺と鰻 — Simonides Amorginus (Athenæus vii. 299 C.)
- 一〇 驢馬の心臓 — Solon (Diogenus Laertius i. 51)
- 一一 蛇と驢馬 — Ibycus (Schneidewin, Poet. græci, 176)
- 一二 蛇と鷺 — Stesichorus (Ælian xvii. 37)
- 一三 狐と狸 — Ion (Leutschneider, Paræom. græci I. 47)
- 一四 田舎人と蛇 — Theognis (579)
- 一五 馳の變身 — Strattis (Meineke, Frag. com. 441)
- 一六 蛇と蟹 — Alcæus (ap. Furia, note on f. 231)
- 一七 犬と影 — Democritus (Stobæus x. 69)
- 一八 北風と太陽 — Sophocles (Athenæus xiii. 604 D)
- 一九 兎と獵犬 — Aristophanes (Vesp. 375. Ran. 1191)

二〇 二つの蟹 — Aristophanes (Pax 1083)

二一 師子の皮を着た驢馬 — Plato (Cratylus. 411 A)

此表中の話を親しく原本について調べればすぐ解る如く、是等の喩言は、獨立の話として取扱はれてゐるに、大概、文章の綾、或は警句として、ほのめかされてゐるので、且つ多くは笑話として味はれたやうだ。これらは文字發明以前よりして、人口に膾炙し、雅俗ともに玩んだのだから、一篇の書として古代から傳つたのでは無く、やつと紀元前四世紀の頃になつて結集が出来た。それは有名なる歴山府文庫の建立者 Demetrius Phalensis の撰で、他に希臘諺語集を編んだ如く、蓋し同じ材料からして作上げた Logon Aisôpeion Synagôgai 即ち『伊曾保物語集』である。これが多分伊曾保の名を冠した希臘喩言集の濫觴である。

らう。Diogenes Laertius はデメトリウス著作目録中に之を擧げてゐるが、今は傳はつてゐない。

然し、フイドルスは確に此書を前に置いて其諭言集を編輯したらしい。其證據の一といふのは、第五卷第一の諭言として Demetrius et Menander. といふ、さほど奇抜でも無い逸話を掲げてゐる事である。突然かうといふ關係も無い話が此處に出でゐるのは、誰しも訝る所だが、もし、デメトリウスの結集で而も後世の編者が原著者の逸話を書足して置いた一本を、フイドルスが参考したと推測すれば、何故此話が入つたかといふ疑は直に氷解しようではないか。

三世紀希臘律語集バブリウスの原本は何だらう。有名な Suidas の古書に據れば、もと此書は十卷より成るといふ。

アトス本は完璧で無い、書中の喩言は希臘文字順に列べてあつてアルフ、からオミクロンまでしか無いが、スイダスの言其他の考證と合せ考へると、二世紀の文人 *Nicostratos* の集めた *Deamythia* 『喩言十卷』がバブリウスの完全本に基礎をなしてゐるやうだ。而して當時學界の形勢からして、二世紀の文人ニコストラトスが有名なる歴山府朝の『伊曾保物語集』を知らずにある筈は無からうから、つまり誰が伊曾保物語を書いたかと問はゞ、まづ無造作にデメトリウス・フレルスと答へても可い。

## 一〇

これにて希臘以降西洋に於ける伊曾保物語の由來は大凡

の骨組だけ示したことになるが、スタインヘエエル本前後幾多の喩言集冒頭に掲げてある伊曾保傳について一言したい。此傳記はわが文祿本にも、また元和、寛永本にも載つてゐて、古くより *Maximos Planudes* が童蒙教訓の書として作爲したと傳へてある。然し希臘の確とした書に典據があるので、何でも無く、實はブラヌデエス以前の俗書から出てゐる。これはサロモン傳説の系統に屬する賢者 *Alki* の物語であつても、とは希伯來の *Achikar* 傳に基く。紀元前三世紀の頃に出た *Tobit* 書が此話の文獻に現はれた始で、其一部は *Strabon*, *Clemens Alexandrinus* に痕跡をとゞめ、かくて幾分か古代希臘文學に混入して來たらしい。而して此希伯來傳説がどうしてブラヌデエスの伊曾保傳になつたかといふ逕路はまだ分明しない、

これからの研究を待つ可きものである。(Karl Krummbacher—  
Geschichte der byzantinischen Literatur 参照)伊曾保の正傳と覺しい  
ものは Herodotos (ii. 134) に薔薇紅臉の名ある名妓 Rhodôpis が  
財を捐て、一大金字塔を建立した話を擧げた序、Logopaios (物  
語の作者) Aisôpos も此名妓と共に奴隸であつたと書いてある。  
此處の文に據ると、伊曾保は Samos の一奴隸民で紀元前五  
〇年頃に榮え、恐らくデルフイの託宣の爲、殺害され、後、彼が主  
人 Iadmon の孫、爲に贖殺金を請求したといふ事實だけしか解  
らない。又伊曾保が不具の醜男であつたといふ事も頗る古  
い傳ではあるが、後世の造形術を外にして何の證據も無い。  
或は aischros (醜) ôps (面) の二語で Aisôpos の語源を説明したもの  
か。さうならば丁度伊曾保は異相に通ずといふ洒落ぐらゐ

の價值しかあるまい。

## 一一

これより更に古く伊曾保ぶり喩言の起源を探らうとすれば西洋を離れて、東洋に移らねばならぬ。時代は古くなる、研究はまた行届いてゐない、加之問題は愈、廣大になつて來て、一動物譬喩談の詮議ばかりでは無く、傳説、神話、風俗、信仰の起原傳播等に立入り、所謂俗說學 Folk-lore の根本問題に觸れざるを得ない。こゝでまづすべての民話俗說の説明に關する態度を明言して置きたいが、本論の講述者は、此問題の一般説明に就いて Tylor, Lang 等の學說所謂人類學派に與みする者である。随つて動物譬喩談或は單に動物談を説明する時も、同一

程度の文化に於ける人心の合一を思ひ、又未開時代或は未開人種たちは人間と同じやうに動物が談話し行動すると信じてゐる事實に基いて、議論を進まして行く。 *Beast-fables* の前に *Beast-fables* の在る事は、喩言研究者の常に念頭に置く可き所で、つい文明人の心になつて、之を忘却すると、あらぬ方の説明に陥り易くなる。動物の談話する事は、未開人の堅い信條であつて、まだ今日になつても獨逸、羅馬尼亞、佛蘭西、瑞西、英吉利等の片田舎では、降誕祭前夜、又新年に動物が談話すると信じてゐる農民が随分ある。(B. Thorpe—Northern Mythology 等参照)。

然し種々の人類學或は俗說學上の材料が今日の如く豊富で無かつた前世紀の學界では、本論の問題、動物譬喩談に關して古今東西に驚く可き符合一致あるを見た時、人類全體から

觀察せず、一時代一人種、一語族だけから説明しようとする傾向の方が多数であつた。即ち伊曾保物語其他の動物譬喩談が西洋にも東洋にも数多い一致類似があるにつけ、おほよそ四種の説明が出た。第一は、亞利亞説とでもいはうか、所謂印度歐羅巴語を有する人種が遙かの昔に、同一の地方に集合してゐたと假定し、従つて同一の俗説を有つてゐたのが、後世になつて、四散したのだといふ説明で、Grimm 兄弟主として之を唱へた。第二は言語疾病説である。隱喩メタファーを事實と思做す人心の一傾向は、はじめ單に一種の修辭であつたのを説明の談話にして、了ふのだといふ意見で大概の神話傳説を論じるのである。Kuhn 之を唱出して、Max Müller 之を普及した。第三を通借説と名づける。種々の傳説民話或は殊に動物譬喩

談が、あのやうに相一致し相酷肖するのは、唯相互に貸借したのであるといふ極めて自然で而も簡単な説明であるが、之を正確に證明しようといふには到底凡才の企及ぶ所では無い。それには Theodor Benfey の如き該博なる學殖と犀利なる見識とが必要である。實にベンフイは稀世の學識を傾倒して一八五九年印度の古書 Panchatantra『五部書』の翻譯に、有名なる長序論を付して、かの通借説を發表した。第四はタイラア、ラング等の流布した前記の人類學派説で、之を活物論風の説明と呼んでも可い。さて是等の四説中、其孰れを採る可きか。大體論としては、第四の活物説が最も合理に見えること上述の如くであるが、伊曾保物語のやうに、特殊の結構と目的とを有する動物譬喩談の起原を尋ねるには、どうしてもベンフイ等

の通借説に大助勢を乞はねばならぬと思ふ。

## 一一一

伊曾保物語と東洋の譬喩談とに共通或は類似の話が多くある事は、印度學其他の發達につれ、東邦の知識が殖えるに従つて益々顯著になつて來た。はじめ伊曾保が奴隸民であつたといふ古傳に據つて、直にこれを外國人と定め、亞刺比亞、猶太等の出と推測した學者の説もあるが、何の證據がある譯では無い。また亞刺比亞、希伯來の語で傳つてゐる幾多の譬喩談があるのので、これを伊曾保物語の原本と信じた時代もあつたが、少しよく調べてゆくと、是等の書が却つて伊曾保物語から發してゐる事を發見する。其他埃及或は亞志利亞の譬喩談

に連絡を求め人もあるが、こゝには關係も類似も極めて薄  
い。

然しながら東洋の古文明國印度に行はれた動物譬喩談と  
希臘喩言伊曾保物語との類似は否定すべからざるものであ  
つて、何等かの關係が二者の間に在ることは疑無い。此二者  
の類似は、活物論アクブツロンが生んだ偶然の暗合とのみ聞流されぬ。な  
るほど妻が夫を欺き、奴僕が主人を詐る話に用ゐられる策略  
は無關係の二國民間、偶然暗合する事もあらう。同じ程度の  
文化にある二國民が、各自獨立に、似たやうな考を持つことは  
あり得可く、どこも人情に變りはないから、或る點まで、同型の  
話を作り出すであらう。然し、いかに古來の活物論が深く通  
俗の精神に浸染してゐても、わざわざ動物譬喩談といふ形式

までも同一な同じ筋の話を、二國民別々に發明しようとは思はれない。而もさういふ話が一つや二つなら、まだしも、數十種まである以上、これは單純な暗合では無いと、まづ假定せねばならぬ。

印度噺言集の問題は、伊曾保物語の研究よりも更に廣大且つ複雑であるから、こゝに細説は出來ない。學者の夙に知る如く、佛教徒間に行はれた *Jātaka* 闍多伽(本生經) *Avadāna* 阿波陀那(譬喻經、出曜經)又佛教の書とは言へないが、それに發源した *Pancatantra* (五部書) *Hitopadeśa* (嘉訓)等は或は巴利語或は梵語で、今日傳來してゐる。漢譯藏經に就いて闍多伽、阿波陀那の話を拾ふことも出来る。即ち唐釋道世撰法苑珠林二十卷(高宗總章元年)を見ても解るし、また Stanislas Julien — *Les Avadānas*,

contes et apologues indiens inconnus jusqu'à ce jour. 3 vol. Paris. 1859  
の根據たる明焦竑撰焦氏類林二十四卷を涉獵するも宜から  
う。梵本巴利本及び其後流轉した波斯本、亞刺比亞本及び歐  
羅巴本について Bentley, Richard Schmidt, Fausböll, Cowell 等の研究  
が既にあるが、漢譯本其他に就いては更に専門家の考證を待  
ちたい。(此項 A. A. Macdonell—Sanskrit Literature; A. Baumgartner—  
Geschichte der Weltliteratur, II 參照)

是等の印度噺言集を一寸窺いて見たばかりでも、東西洋の  
噺言に何か關係のある事は誰にも解る。然し、そこで直ぐ伊  
曾保物語は印度から傳來したものと立言するのは、少し速斷  
であらう。第一今日一般に伊曾保物語と言慣らしてゐる集  
は、前にも述べた如く、フイドルス噺言集に、其後種々雜多の噺

言が附加したので、後者の一部たる所謂希臘散文諭言集中の或話は確に東洋の諭言 Bidpai, Syntipas 等から來たものである。それゆゑに此ビドパイの部分だけに指を當て、論ずれば、勿論印度諭言集から借受けて來たと言へる。希臘譬諭談の印度起原説を主張する Rhys Davids の如きは、此誤謬に陥つてゐるのであらう。然しながら眞に印度希臘の先後を決するには、もつと叮嚀に伊曾保物語を分解して、謂はば地質學で行ふやうに古生元層、中生元層、近生元層と年代の順を追つて區別して後、比較もし、結論もす可きものだ。

スタインヘエエル本又カクストン本伊曾保物語中一々の話に就いて之に類似する東洋の諭言を求めると其數約七十種ある。其中で亞刺比亞本 Logman 志利亞本 Sophos 波斯亞本

Mesnevi 土耳其本 *Tuhnameh* 等に在る類話は顧るに足らぬ。是等の書は希臘本から發してゐるか、或は中世に出來たものだから、本論には必要で無い。唯最も必要なのは所謂ビドパイ本中の類話で、これに注意を向けねばならぬ。

### 一三

*Bidpai* 或は訛つて *Pilpay* といふ。今はビドパイ物語と稱して、一固有名詞と思倣されてゐるが、それは亞刺比亞本に婆羅門の師 *Bidbah* といふのが顯はれて以來のこと、實は *Pehlevi* を通じて梵語に遡れば *vidyāpati* (學師) といふ普通名詞となる。要するにビドパイ物語は紀元六世紀の頃既に存在してゐた『五部書』パニチアフケトル 即ち二頭の豹 *Karataka Damanaka* の話に源を發して、古

代志利亞本 *Kalīlagh wa-Dammaghl* 亞刺比亞本 *Kalilah va Dinnah* 等種々の名を附せられて西漸し、希臘本 *Stephanitēs kai Ichnēlatēs* 羅甸本 *Directorium humanae vitae alias parabola antiquorum sapientum* 伊太利亞本 *La Moral Filosofia, tratta dagli antichi scrittori* 獨逸本 *Buch der Byspel der alten Weisen* 等の轉譯に依つて、中世の歐羅巴文學に大影響を與へた。(Krummbacher—*Op. cit.*; B 表參照) ヘンフ、イは、諭言類話穿鑿の際、力を盡して此ビドバイ物語を分析した。(Panchatantra, §§ 19, 58, 77, 112, 118, 160, 220, 222, 227, 229, 230) さてもしこれが伊曾保物語の本體に影響を及ぼしたとすれば、紀元前三〇〇年乃至紀元一〇〇〇年の間であることはヘンフ、イも既に述べた如くで、便宜の爲此年代間に起つた影響や類似の蹤を、上述の三地層に別けてみるのが、さしあたり着手す

可き事であらう。

まづ新しい所から始め、近生元層ともいふ可きは、ビドバイの波斯亞譯其他或は印度本中後世の竄入にのみ在るカクストン本伊曾保物語中の類話である。

其話はざつと次のやうだ

- 一 庭鳥と玉 (Romulus I. i)
- 二 鼠と蛙 ( „ I. iii)
- 三 鷲と狐 ( „ I. xiii)
- 四 病める師子王と驢馬 ( „ I. xvi)
- 五 驢馬と犬 ( „ I. xvii)
- 六 燕と諸鳥 ( „ I. xx)
- 七 盗人と犬 ( „ II. iii)

八 狐と鶴 (Romulus II. xiii)

九 狼と鬮體 ( " II. xiv)

一〇 牛と蛙 ( " II. xx)

一一 人間と木 ( " III. xiv)

一二 腹と四肢六根 ( " III. xvi)

一三 孔雀とユノオ ( " IV. iv)

一四 狐と師子王 ( " IV. xii)

一五 狐と庭鳥 (Fabulae Extravagantes V. iii)

一六 鷺と鳥 (Remicinus i)

一七 二人の妻を持つ老人 ( " xvi)

一八 駱駝とユピテル (Avianns vii)

一九 日の神と慾張、羨しがり ( " xvii)

次に中生元層ともいふ可きはビドバイ物語の原始本に在る類話である。

其表下の如し。

- 一 犬と影  
(Romulus I. v.; Benfey §17)
- 二 人間と蛇  
(I. x.; B. §150)
- 三 二疋の狗<sup>\*</sup>  
(I. ix.; B. §144)
- 四 鷺と烏  
(I. xiv.; B. §84)
- 五 乾酪を啣へた鴉と狐  
(I. xv.; B. §143)
- 六 師子と鼠  
(I. xviii.; B. §130)
- 七 王を欲しがる蛙<sup>\*</sup>  
(II. i.; B. §164)
- 八 山の産  
(II. v.; B. §158)
- 九 善人と蛇  
(II. x.; B. §150)

- 一〇 禿頭の人と蠅 (II. xii.; B. §105)
- 一一 鳥と孔雀 (II. xv.; B. §29)
- 一二 アンドロクレス<sup>\*</sup> (III. i.; B. 71)
- 一三 エベソの後家<sup>\*</sup> (III. ix.; B. §186)
- 一四 病める師子王 (III. xx.; B. §22)
- 一五 狐と葡萄<sup>\*</sup> (IV. i.; B. §45)
- 一六 猫と鼠 (IV. ii.; B. §73)
- 一七 龍と鹿 (Fabulae Extravagantes V. iv.; B. §150)
- 一八 狐と猫 (V. v.; B. §121)
- 一九 蛇と農人 (V. viii.; B. §150)
- 二〇 山羊 (V. x.; B. §50)
- 二一 鷺と鼯 (Remicius ii.; B. §84)

- 二二 狐と山羊 (iii.; B. §143)  
 二三 \* 人間と木像 (vi.; B. 200)  
 二四 龜と鳥 (Avianus ii.; B. §84)  
 二五 師子の皮を被た驢馬 (iv.; B. §188)  
 二六 二つの瓶 (ix.; B. §139)  
 二七 金の卵子を生む鶯鳥 (xxiv.; B. §159)

前表中 \* 印を付けたのは、ペンファイが思ふほどに類似の點が少いのを示したのである。

さてかうして見れば、古代印度の喩言中に、さつとまづ伊曾保物語本體中の類話を尋ね當てた譯であるが、これ丈ではまだ希臘古代に行はれた喩言の源へ遡つたとは言はれぬ。何となればビドパイ物語の原始形『五部書』(Pentateuch)が古代希臘の喩言集

より古いといふ證據が無いからである。『五部書』の年代は確と解らぬ。波斯の大王 Khsru Anushîrvân (五三一—五七九)が醫師 Barzûh に命じてヘフレギ語に之を譯さしたといふ説が久しく行はれてゐるが、其後の研究に據ると、此譯は現存梵本『五部書』に據つたので無く、別の異本に基いたものらしい。『五部書』は六世紀よりずっと以前に存在してゐて、紀元一二世紀頃求那第耶 Guṇādhyā 撰ブラクリト語の小説集 *Bṛihatkathā* に引用されてゐる。(G. Bühler—Detailed Report of a Tour in search of Sanskrit MSS. made in Kashmir, Rajputana and Central India. Bombay. 1877. p. 47) そこで『五部書』の年代を紀元一世紀前後としても紀元前四世紀デメトリウスの『伊曾保物語集』はおろか、紀元一世紀フイドルス結集と甚しい先後は無い。印度が先か、希臘が前か、是で

は決定されぬ。

## 一四

然しながらどうも印度起原説の方には強味がある。「五部書」と雖、或は紀元前數世紀の昔に編修し始められたかも知れないと言ひ得るのみならず、かの闍多伽(本生經)といふ佛敎文學が其後學者間に知れわたるに従つて、印度説はぐつと優勢になつて來た。畜生、本草等の形に轉生した佛陀の前生を種とするこの本生經は紀元前四世紀吠舍釐 *Vesali* 宗論の時、既に或形で存在してゐた。又其中の數十種は紀元三世紀の窣堵婆 *Stupa* (寶塔)に浮彫となつて、今 *Bharahat*, *Sanchi*, *Amarāvātī* に存してゐる。而も *Bharahat* の窣堵婆中には、現在、明らかに

巴利語で例へば *Bidāla-Jātaka* (猫の闍多伽) *Kukula-Jātaka* (庭鳥の闍多伽)と話の題までも刻字してあるものもある。(A. Cunningham — *The Stūpa of Bharhut*; Rhys Davids — *Buddhist Birth Stories* 参照) プラハト塔面の闍多伽は Fausbøll 本の番號で 545, 12, 267, 546, 538, 357, 514, 523, 62, 206, 349, 32, 485, 181, 461, 407, 324, 372, 539, 46(268), 42, 400, 174, 352, 383, 9, 488, 547 である。) してみると本生經其ものは確に少くも浮彫の時代即ち紀元三世紀より古くなければならぬ、或は其本生經の一部が紀元前五世紀の釋迦牟尼自身の口に出たかも知れぬ。更に進んで釋迦は前代から印度の民間に行はれた動物譬喩談を借り來り、此寓言の形式で教訓を垂れたとも言へる。是に至つて始めて希臘古代の喩言と印度古代のそれとを眞に比較する事が出來よう。所謂

古生元層の類話が解つて來て下の表となる。

- 一 狼と鶴 Javakuna-Jātaka. Fausböll. 308.
- 二 師子の皮を被た驢馬 Sīhacamma Jātaka. F. 189.
- 三 犬と影 Ulladhanuggaha Jātaka. F. 374.
- 四 龜と鳥 Kacchapa Jātaka. F. 215.
- 五 狼と羊 Dīpi Jātaka. F. 426.
- 六 禿頭と蠅 Makasa Jātaka. F. 44. Rohiṇī Jātaka. F. 45.
- 七 狐と鳥 Jambukhādaka Jātaka. F. 294. Anta Jātaka F. 206.
- 八 金の卵を生む鸞鳥 Suvanṇahansa Jātaka. F. 136.
- 九 蟹と鳥 Suvanṇakakkataka Jātaka. F. 389.
- 一〇 犢と牛 Munika Jātaka. F. 30.
- 一一 孔雀とユノオ Nacca Jātaka. F. 32.

- 一二 河水を飲まうとする犬 *Kāka-jākata. F. 146.*
- 一三 師子と共に歩く驢馬 *Virocana Jātaka. F. 143.*
- 一四 狐と庭鳥と犬 *Kukkuṭa Jātaka. F. 383.*
- 一五 人間と蛇 *Mahābhārata. (apud Liebrecht).*
- 一六 櫛と葦 *Mahābhārata xii. 4198.*
- 一七 駱駝とユピテル *Mahābhārata xii. 4175.*
- 一八 腹と四肢六根 *Mahābhārata xiv. 668.*

上表中第一五より第一八迄は史詩摩訶婆羅多に類話を見出せる。唯第一五のみはリイブレヒトの言を信じての事、今、其何卷にあるやが知れぬ。第一六の櫛と葦に至つては、所謂門の柳かなで、至極有名な話。娑竭羅 *Sāgara* (龍王) が大木の根こぎにされ、葦の却つて流れないのを訝つて尋ねる時、恒伽

福水 Ganga が答へる條であるが、これに似た話がもう一つ印度にある。Calmali といふ雪山の大樹、大言して風神 Pavana を罵り、其夜悔いて、悉く己が枝を除き幹のみを残したところ、翌朝風神之を見て大に笑ふといふのである。第一八の腹と四肢の話も摩訶婆羅多にあるが、これだけで直ぐ此話の印度起原は定められない。なるほど、これは Upanishad, Zend Yaçna, Pancatantra 等にも在るから、東洋の起原らしくあり、且つは阿波陀那の中、例へば漢譯雜譬喻經地頭尾共諍喻にさへ類話が出てゐる。然し Maspero の發見した紀元前三世紀の紙葉中にある古代埃及の腹と頭の間答あるを如何にせむ。ブルウタルヒオスのコリオラヌス傳、リキウスの羅馬史にある同一の話も、してみると東洋から傳はつたので無く、獨立に發生したとも

思へる。類話と言つて直ぐに通借があつたと断定する事の

## 伊曾保物語考

## 五四

てゐたが、それはまだ諸種の材料が揃はなかつて、闍多伽の古  
いことも未だ知れず、而もバブリウス集が、實際よりも古く思  
はれてゐた當時の知識に據つた爲であつて、若しペンフイが  
今日居たならば、或は反對に印度説へ傾いたらうと思はれる  
節もある。

文献の年代から推しても、喩言の内容から考へても、上に示  
した闍多伽、阿波陀那、摩訶婆羅多、五部書、嘉訓等に見える伊曾  
保喩言集の類話二十三種ばかりの中、とりわけ殊に闍多伽の  
みにある十四種は、印度から何等かの媒介によつて、希臘へ傳  
はつたものと推定して、大差はあるまい。然し Rhys Davids の  
如く殆ど凡ての希臘喩言が印度に發したと結論するのは間  
違だ。氏は所謂希臘散文喩言集を以て伊曾保物語の本體と

誤解してゐたのみならず、伊曾保物語の多數は古代の佛書に遡つて尋ね當てることが出来るから、恐らく印度が此物語の源だらうと漫然論結してゐるが、よく調べて見ると、眞に確かな類話は甚だ少い。多數といつたのは僅に十數種である。然るに希臘羅馬の古代に行はれた喩言の數は、ざつと五百種（*フアイドルス*二百、*バブリウス*三百）*巴利結集*の闍多伽にはざつと五百五十種の話がある（*Spence Hardy—Eastern Monachism p. 170*）といふからには、僅か十數種の共通類話があるだけで、一方が他方から、そつくり傳來通借したと斷言するのは不合理であらう。それ故本論の講述者は、*ジョゼフ・ジュイコプス*の説の如く、少數の喩言が確に印度から希臘へ傳來した事と信じると同時に、希臘も亦獨立に多數の喩言を發明したと考へる。

一五

ジエイコブスの爛眼は、東西洋喩言の橋渡しとして他の一方面に頗る興味ある研究の新天地を發見した。Talmud, Midrash文學の中から幾多の喩言を蒐集したのである。此收穫を五部に別つ。

- (一) 最古の印度希臘喩言にあるタルムッド喩言
- (二) 希臘喩言及び後期印度喩言中のタルムッド喩言
- (三) 印度にあつて希臘に無いタルムッド喩言
- (四) 希臘にあつて印度に無いタルムッド喩言
- (五) 印度にも希臘にも無いタルムッド喩言。

是等のタルムッド喩言は、印度希臘のそれに比して其數頗る

少く、僅に三十種ばかり、而も其中六種或は四種を除いて他は皆、印度か希臘か、或は双方に類話を求め得といふ以上これはまさしく他國より借來つた話である。それでなほ精しく調べると、タルムッド<sup>ト</sup>諭言は希臘よりも、寧ろ印度に縁近いさうだ。是等の諭言は抑も何時頃から行はれ出したか。タルムッド中最古の諭言は Rabbi Jochanan ben Saccai に關係して話されてある。師は紀元前一世紀、耶路撒冷攻落の後「Talmé」の學舎を設立して、一種の學風を振興した人で、傳に據れば「其學科より Mischle Shu'alim (野干物語) 及び Mischle Kobsim を逸せず」とある。後の書に「紀元二世紀の人 Rabbi Meir 野干物語三百種を知る」又「ラビ・メイルに至つて諭言の學者亡ぶ」ともある。

「ミシユレ・シユハリム」は狐の諭言といふ謂だが、「ミシユレ・コブシム」

に至つては何の義とも解らぬ。然しジェイコブスに従ふと、希臘の古傳に一種の喩言集は常に *Kybisas*, *Kybiosios* 或は *Kibyssēs* といふ利比亞人の撰だといふ話がある。現にバブリウスも「喩言を始めて唱へたは希臘人で *Aisopos* 利比亞人で *Kibyssēs*」と二卷の序歌に言つてゐる (*Rutherford—Babrius* 参照)。しからは *Kobsim* 或は *Kibyssēs* では無いか知ら。

然るに希伯來文字 *Mem* □ と *Samek* ◯ とは能く似てゐて、兎角筆寫の際誤り易い字である。もし *Mem* を *Samek* として見たらどうだらう。即ち元の *Samek* が *Mem* に誤寫されたものと假定したらどうだらう。あの難解の *Mishle Kobsim* が *Mishle Kobsis* になる。而して希伯來には母音を表はす文字が無いのだから、*Kobsis* を *Kubsis* と讀んでも差支無いので即ち直に

Kybisēs 物語と讀めるでは無いか。希臘の古傳もある事であり、かたがた此推定は確められよう。然らば紀元一世紀ヨカナン・ベン・サッカイ師の世にはキユビセス物語集が既に在つたものと見える。

然し更に百年を経てマイル師の世、唯三百種の野干物語あるのみで、キユビセス物語の名が見えないのは何故だらうといふに、オットオ・クルウシウスの研究に従へば三世紀のバブリウスは二世紀のニコストラトス『デカモソナ諭言十卷』を律語にしたので、話の數凡そ三百種ある。こゝで上記バブリウス二卷序歌の語を参照してみると、ニコストラトスは、デメトリウスの『伊曾保物語集』と『キユビセス物語』とを合せて編修したものらしく、従つて希臘文學を移植したといふマイル師の知つてゐた所謂野

干物語三百種とは、ニコストラトスの『諭言十卷』である事が解る。キユビセス物語は既に其中に含まれてゐるから、自然其名が亡びたのであらう。

地中海を取圍む古代文明國には、古くより希臘諭言と利比亞諭言との區別を立てる傳説があつて、これはバブリウスのみでは無い、アイスヒュロスもアリストテレエスも、幾多の美辭學者も、また皇帝ユリアノスさへも、此二流の諭言を差別してゐる。即ち希臘の古傳には諭言の一種は確に外來のものであるといふ説が絶えずにゐたのだ。さて此漠然たる利比亞よりとは何處からだらう。曰く埃及經由印度と解して可い。尤も印度傳來の途に二つある。一つは希臘最古の諭言中にほのみえる印度の影響で、これは佛教以前、即ち閻多伽以前

の印度民俗傳説が浸潤したものである。もう一つは Avianus、Babrius 等に表はれた閑多伽の影響で、これば或る一定の期間に東洋から渡來した譬喩談、即ち利比亞喩言キユピセス物語の感化である。前者は民俗傳説の不思議なる傳播或は暗合で、到底其傳來の逕路を正確に辿り知ることが出來ないが、後者の渡來した一定の期間は、種々精密なる考證に依りて、略推定する事が出來る。ジエイコブスの説によれば、此渡來は紀元一世紀錫蘭の使節が羅馬に朝して皇帝クラウデウスに見えた時の事だといふ。此時閑多伽ぶりの喩言數種を載せた所謂キユピセス物語が傳來したのだらう。

然し、一體キユピセスといふ名はどうして出來たのか。此疑問はまだ明かに釋けない、Léon Feer (*Avadana-Cataka*, Paris 1891)

の説によれば、いつもよく闍多伽中に引合になる覺者ブツダは、釋迦以前二十七佛陀の第二十七者、迦葉波 Kāsyapa であるといふ。然らば希臘噺言が伊曾保といふ人名の下に集つた如く、利比亞噺言も、夙に Kāsyapa といふ覺者の作となつてゐたのであるまいか。Kāsyapa が轉訛して Kybisses となるか、どうか、そこは、勿論、明言できぬが、とにかくこれは一の假定説、而もどうやら脈のありさうな説だ。ジェイコブスは本生經以前に Itahāsa Kāsyapa (Also sprach Kāsyapa) といふやうな噺言集があつたのだらうと想像を逞しうした。今日の所では噺言の古史はここで止まる。餘は想像に想像を重ねるのみ。

論少し歧路に入るが、一時伊曾保物語の源かと疑はれた亞刺比亞本 Loqman 物語其他に就いて一言しよう。要するに口

クマン物語は十三世紀の一基督教徒の作、ロクマンは Balaam の複稱だといふ事は、夙に Derenbourg (Berlin, 1858) に看破され、Petrus Alphonsus (Disciplina clericalis, ii. 7) に “Balaam qui lingua Arabica vocatur Lucaniam (Lucania)” とあるので證明されてゐる。又 Landsberger (Die Fabeln des Sophos, 1859) が發見したスリア噺言六十七種は、實の所、十一世紀頃の作で、希臘の翻譯である。集中五十一種の噺言は一七八一年莫斯科寫本に據つて Mathai が出版した *Syntipa tou philosophou ek tôn paradeigmatikôn autou logôn* 中六十二種の希臘噺言と同一である由。どの道、ロクマンもソフ、スもシュンテ、パスも、大體に於てバブリウスの燒直に過ぎぬ。こゝに一つ注意す可きは、馬太出版の *Syntipas* 噺言と、同名の書 *Syntipas* とを混同しない事である。後者は中世以來東羅馬

から歐洲全體に流行した有名の書で、東洋本では *Sindibad* 或は *Sandabar* 物語、西洋本では七賢人物語、*Dolopathos*, *Erasto* 等種々の名で知られてゐる。(Krummbacher—*Op. cit.*; Bentley—*Mélanges asiatiques* III. 2. 188—203.; Panchatantra I.; Comparati—*The Book of Sindibad* 等参照)。此七賢人物語に就いては別の研究を發表したいから、こゝには只馬太の出版と無關係の點を斷つて置く。

これでまづスタインヘエエル本又カクストン本の解剖から着手して終に喩言の源に遡り、其路すがら所謂 *Romulus* 四巻がフ、イドルスの散文化、*Remicinus*, *Avianus* がつまりバブリウスだと解つて、伊曾保物語本體の變遷を明らかにしたが、いまだ *Fabulae Extravagantes* といふ部の出處を述べなかつた。中世に於て新に附加した此喩言は、動物譬喩談といふよりも寧ろ動

物諷刺談であつて、かの Roman du renard (「狐の裁判」) に類似してゐる。而してこれは常に Marie de France の名と關係がある。このマリイ・ド・フランスとは何者ぞ。

## 一六

中代英文學、那耳曼佛蘭西文學等、英佛の文藝に跨つてゐるこの才媛の著作中、殊に其喩言集に就いては、キルツブルフ大學羅曼及び英吉利文獻學教授 Eduard Mall—Zur Geschichte der aeso-pischen Fabelichtung im Mittelalter (Zs. f. rom. Phil. ix. 161—203) の研究があり、其遺業を續いて Karl Warnke—Die Fabeln der Marie de France (Bibliotheca Normannica, hrsg. von Hermann Suchier VI. Halle, 1898) がある。まづ第一に決定す可きは今 London, Bruxelles, Göttingen に現存

する羅甸諭言集、即ちエルギウは *Romulus Anglici cunctis exortae fabulae* (Hervieux II. 564—648) と命名しエステルライがロムルス刊行の際附録として掲げた三寫本が、果してマリイ諭言集の原本であるか否かである。マルの精細なる考究で次の結果が出た。是等の三寫本は三部から成立つ。

- (一) ロムルス集の一異本十世紀編修 *Romulus Nilanti* (Anonymus Nilanti アドマル集とは別) から拔萃の諭言四十五種。
- (二) 普通のロムルス集から拔萃の諭言十五種。この終に *Hactenus Esopus; quod sequitur addidit rex Affrus* とあつて、
- (三) 追加諭言七十四種。其内多數はマリイ諭言集に出  
てゐる。

一見しては如何にもマリイの原本らしいが、實はさうで無

い。マルの研究に據れば、かの有名なる「猫に變る娘」(或は鼠の夫さがし)の話が、此寫本中にも見えてゐるが、話の中に鼠が夫を覓めに歩きまはつた末、終に *Mulus* (騾馬) と結婚するに至る條は、確にマリイ喩言七三、*De mure uxorem petente* の中、古代佛蘭西語 *Mulet* (鼠)。近代佛蘭西語 *Mulet* の誤譯であるから、羅匈寫本の方が却つて後に出來たので、マリイが其原本である。(此説明に關してはブルンケに少しく異議があつて、此處の *Mulus* は英語の *Mole* 土龍の羅匈化かも知れぬといふ。)

ブルンケも亦決論に於てマルと同じく、其爲種々の證據を擧げてゐる一に、マリイ喩言六七、*De corvo pennas pavonis inventente* の第四行

*Sis esguarda tut enyivun;*

plus vil se tint que nul oisel

を擧げ、此處ではどうしても *Sis esguarda* を *si s'esguarda* と校訂して讀まなければならぬのを、羅甸本 (Hervieux II. p. 603) には *Sis* を其儘 *Si les* と解して *Versans igitur eas et circumspiciens, honestum putat si eis circumdatus incedere posset* と譯してゐる。これだけでも羅甸本の方が翻譯と解る。

それではマリイの原本は何だらう。喩言の跋第一三行に

*Esope apelé um cest livre,*

*kil translata e fist escriivre,*

*de Grin en Latin le turna.*

*Li reis Alvez, ki mult l'ama,*

*le translata puis en Engleis,*

e jeo I'ai rimé en François.

とあつて、撰者マリイは確に英吉利本に基いたと明言してゐるが、篇中所々マリイが佛蘭西語に翻譯しにくかつた語 *widert* (65, 27 *horney*) *wideoc* (57, 20 *huitecox*) *welke* (12, 3; 14, 18 *whelk*) 等が其儘中代英語で残つてゐるので、愈々此斷言は確かめられる。加之、最も有力なる點は *Sepande* (23, 34, 39; 74, 10; 96, 7) といふ難解の語で、意味はヴルンケの解註に *Götin (der Tiere)* とある如く神の義であるが、後世の寫字生は其意味を解せなかつた爲、多くは *justise*, *deusse*, *nature*, *criere* 等の語を代用して置いた。然しマルは此語を直に古代英語 *Scepend* (e) 中代英語 *Schippend* 北部及び中部方言 *Sepande* (*Mätzner-Goldbeck*, *Altenglische Sprachproben* I, p. 57) 卽ち造物主と看破し、これに據つて、マリイが英吉

利の原本を用ゐたことを證明するのみならず、更に其原本は古代英語の本でも、アルフレッド大王の作でも無く、Sepante ione が缺けてゐる所から、原本は十二世紀の初年、多分英國中部方言で書かれたものだらうと推定した。而して Tilais Alvez とあるはロムルス集が「皇帝」ロムルスの作といふのから類推附會したのである。

ジェイコブスは更に進んで此アルフレッドを何者かと尋ね Roger Bacon (Compendium Studii. ed. Brewer. p. 471) の擧げた Alfred the Englishman といふ學者だらうと、臆説を築いてゐるが、どうもまだ全く信は措けない。而して論中に希伯來の有韻散文 Mishle Shulim「野干物語」(諭言百七種)の作者を擧げたのは後人を益する事頗る多い。Roth, Steinschneider, Warnke も此希伯來諭言を精

密に研究した。此作者は Rabbi Berachyah ben Natronai ha-Nakdan  
といひ、其諭言集は、マリイ本と同系統に屬して、亞刺比亞を通  
じて、餘程、印度の影響を受けてゐる。或は東羅馬から來た東  
洋種と接觸してゐるとも言へる。此點に就いては學者の説  
がまだ一定しないが、とにかく *Fabulae Extravagantes* は東洋諭言  
の傳來轉訛と見て差支は無い。

## 一七

マリイが諭言集以來十二世紀の英國は一時實に諭言の本  
國の如く見えた。現に種々のロムルス集が、此國で筆寫され、  
殊にロムルス集一二三卷を羅甸の聯句に書き改めた寫本は  
*Garicius, Garrus, Galfredus, Hildebertus, Ugobardus de Salmone, Walthe-*

rus, Salo, Salone, Serlo, Bernard de Chartres, Accius, Alanus 等の名で非常に廣く愛讀された。Névelet が一六一〇年フランクフルトで *Mythologia Aesopica* に出版した集は即ちこれである。所謂 Anonymus Neveleti であるが、エルギウの穿鑿に依つて、今此書の撰者は Gualterus Anglicus (Walter of England) と定まつた。其後、此結集の系統やら、他の支流から種々の喩言集が出てゐるが、それはエルギウの大著及び A 表に譲つて置かう。

唯こゝに興味ある一事實は當時英佛に行はれた伊曾保喩言が有名なる Bayeux の帷帳に出てゐる事だ。これは女王マティルダが親から織り成したと傳へて、英國征伐の顛末が、重なる意匠になつてゐて、ハレイ彗星の圖も出てゐる。喩言の意は帷帳の下の縁にあつて、古雅掬す可き味を呈してゐる。其

喩言は「狼と鶴」「狐と鳥」「鷺と龜」「狼と羊」「狐と師子」「師子王と野獸」「狐と山羊」「燕と諸鳥」あとは判明しないが、「二頭の犬」「師子の皮を被た驢馬」「エベソの後家」またもう一つ「狐と葡萄」であるらしい。

喩言集と銘を打たないでも、當時民間に行はれ、僧侶もよく参考した種々の通俗書類、隨筆、說教集等に伊曾保物語の斷片が散見する。其重なるは十三世紀 *Odo de Cerintonia* の *Narrationes*、十四世紀 *John of Sheppey*, *John of Salisbury*, *Walter Mapes* の書である。而して詩人 *Chaucer*, *Gower*, *Lydgate* が喩言を好んだ事は人の熟知する所だ。

中世の終と共に喩言流行の中心は獨逸に移り、印刷術の發明につれて刊本伊曾保物語は、そこから全歐に流布した。獨逸に於ける最初の刊本は *Boner* の *Edelstein* 喩言百種である。

而してスタインへエエルの伊曾保物語集が近代歐羅巴、噺言集の元祖たることは既に述べた如く、これより英國にカクストンの翻譯出で、十七世紀中葉迄は、英吉利本の噺言と言へば殆どこれに限るやうであつたが、其後 John Ogilby, Sir Roger L'Est-range, Rev. S. Croxall 等の新譯が好尚に適ひ今に繙讀せられる。十九世紀に入つてまたも Rev. F. James, Townsend, Caldecott, Crane の新本が出て、皆それぞれの讀者を有つてゐる。

## 一八

十五世紀の獨逸本英吉利本の伊曾保物語中、最後に位する笑話 *Facetiae* は希臘噺言には直接の關係無く、フイドルス其他とは系統を異にするが、廣く民俗傳説を研究する者、或は東西

喩言の關係を深く知らうとする者には、また格別の興がある。スタインヘエエルは自家編修の此部分を *Fabulae collectae* と名づけたが、前に一寸述べた如く、此笑話の一部は十二世紀の初年西班牙に住居した猶太人ペトルス・アルフォンスス著の拔萃である。此僧はじめ *Moses Sephardi* 即ち西班牙の摩西と呼び、一一〇六年國王アルフォンソ二世の保護の下に改宗して名まで變じ、其時猶太人に改宗を勧める爲、改宗前の摩西と改宗後の彼得との問答を面白く書き連ねたことがある。然し一生の述作中、かの笑話集の原本となつた *Disciplina clericalis* はど一世に持離されたものは無い。北はイスラントまでも此書が知れ渡つたといふ。實に東洋の笑話を一時多數に歐洲へ知らしたのは、此書が始りて、*Pere Amfours* の名で、佛蘭西の笑話

Fabliau 伊太利亞の小説 *Novelle* に大影響を與へた。

今一つ、獨逸本中の笑話に材料を供給したのは、Poggio Bracciolini (一二八—一四五九)の *Facetiae* である。古典、寫本の蒐集家として知られた學者で、法王廳の尙書でもあつた、此ポッジオの笑話は一四七〇年頃の刊行で種々の雜書、又見聞から拾ひ集めたのであるから、敢て喩言とは言はれないが、一度、スタインヘエエル本の一部となつてより以來、普通の伊曾保物語に混入して了つた。例へば日本寛永十六年刊行の伊曾保物語三卷中下卷第二九、出家と豕の事、第三〇人の心の定らぬ事は、共にポッジオの書に在る。前者はまた *Le Sage (Gil Blas V. I) Cent nouvelles nouvelles* (96) にもあり、後者は、親と子が驢馬を牽いたり、これに乗つたり、終に擔いだりする話で *Lafontaine* (III. i) に

も *Conde Lucanor* といふ西班牙の笑話集にも又シユンティバスの一異本たる土耳其本「四十國老物語」中、夫人の述べる第一九話にも類話を見る。

之に對して寛永本下卷第三〇、鳥人に、教化する事は、アルフオンソ書中の話である。これは『五部書』(Benfey. i. 381)『菩薩物語』*Barlaam kai Josaph* (六條學報明治四十四年一月參照)『黃金傳説集』*Legenda Aurea*. (c. 175) 其他にある極めて有名の話で、これについては *Gaston Paris* (*Légendes du moyen-âge*. Paris 1904 p. 225—291) の古今東西に亙る精覈なる考證がある。

一體、アルフオンソ、ポヅィオ二書の話は古に行はれて今滅びて了つたといふ小亞細亞から流行しはじめた *Miletos*、或は *Sybaris* 笑話と系統を同じうするもので、なかには全く同一の話もあ

らう、又其後印度波斯亞から渡來したのもあらう。一般に東西の類話を調べて行くと、伊曾保物語の本體よりも、古代末期或は中世の附加竄入の方は東洋風の分子が多い。これはもとより當然の事で、歐羅巴中世には伊曾保ぶりの喩言集のほかに、立派に東洋から渡來した事の明らかであるビドバイ文學、シュンティパス文學、菩薩物語、其他笑話、教訓書の類が澤山あるので、是等の謂はゞ水脈が絶えず、伊曾保物語に出入してゐて、頗る東洋風殊に印度風の色彩を加へるのである。まして古代印歐の交通開けた比、既にはじめより伊曾保喩言は幾分か印度喩言の浸潤を受けたもの、一見して、印度喩言、即希臘喩言と速断する者あるも、あながち無理で無い。而してまだ今日の處では先に述べた如く、希臘喩言が獨立に發達した事を

否定するだけ多數の類話が充分出て来て居ない。

此處に於て和漢の書に散見する喩言めいた小話の一部を列記する事は敢て無益であるまい。これは講述者が調査した結果の一小部分に過ぎないので、素より不完全の表であるが、他にも吾にも後日調査の便にならうと思つて列記する。まづ漢譯藏經中、スタニスラス・ジュリヤンの探し出した十一種の書名を擧げる。

1. Fan-mo-yü kin (Comparaisons relatives aux Brahmanes et aux démons, sutra de 11 folios Ox. 608) 梵魔喩經
2. Tsien-yü (Comparaisons tirées de la Héche, sutra de 4 folios, 585.) 箭喩經
3. Kiün-nien-pi (Comparaisons tirées des boeufs, 764) 群牛譬經

4. Pi-yü (Comparaisons. 736) 譬喻經
5. I-yü (Comparaisons tirées de la médecine. 949) 醫喻經
6. Tsa-pi-yü (Mélange de comparaisons. 1368) 雜譬喻經
7. Khieu-tsa-pi-yü (Mélange de comparaison ancienne. 1359) 舊雜譬  
喻經
8. Pe-yü (Cent Comparaisons. 1364) 百喻經
9. Tchou-kin-siuen-tsa-pi-yü (Comparaisons rédigées d'après les sutras.  
1366) 衆經撰雜譬喻經
10. O-yü-wang-pi-yü (Comparaisons d'Açoka 1344) 阿育王譬喻經
11. Fa-kiü-pi-yü (Comparaisons tirées des livres bouddhiques 1353.)  
法句譬喻經

此他大集譬喻王經二卷、犢子經、鹹水喻經、鸚鵡經、五陰譬喻經、

生經、蟻喻經、賢愚經、雜寶藏經、阿育王傳、阿育王經、十誦律等は、まだ一々詳しく當つて見ないが、喩言研究家のまづ手を下す可き書である。

その證據には例の法苑珠林に就いて探してみると、其一端を擧げて、左の如くだ。

第十九卷、三三に十誦律云………過去世時、近雪山下有三禽獸共住、一鷄、鳥、二獼猴、三象………三五に十輪經云、譬如過去有王、名曰福德、若有犯罪、過乃至繫縛、王不欲奪命、將付狂象、爾時狂象捉其二足、欲撲其地、而見此人、著染色衣、故狂象即便安徐置地、不敢毀損、共對蹲坐、以鼻舐足、而生慈心………は師子を救つて後救はれたア、ンドロクレスの話に近く、西洋では *Gesta Romano-rum* (104) で名高く、東洋では『五部書』(Benley. i. 211)、『西域記』(Stanislas

Julien i. 181; 京都文科大學本三ノ三一)に類話がある。

第二十三卷五八には提謂經、大莊嚴論偈を引いて盲龜浮木に値ふ話。

第廿七卷八〇には智度論からの龍リウの皮の話、雜寶藏經の五百商人の話、八一には僧伽羅刹經の鸚鵡、火林に水を濺ぐ話。

第三十卷一に生經、狡智一少年の話。七に佛本行經一馬王鷄戶の話。

第四十一卷七八に、舊雜譬喻經なる狐、獼猴、獺、兔の四獸の話がある。有名なる闍多伽で西洋にも傳はつてゐる。

第四十四卷九四の法句喻經、狂象に逐はれて井中に隠れる人の話は「ゲスタ・ロマノオルム」菩薩物語「さてはトルストイの書にまで現はれる高名の物語。

第四十五卷九八に大魚事經、僧祇律、一〇〇に舊雜譬喻經、智度論を引用して各話がある。

第四十六卷一〇四、舊雜譬喻經から例の龜と鳥の話、*Kaccha-pa Jataka* がある。『五部書』にも『嘉訓』にもバブリウス、アギアヌにもバイユウ帷帳の織出にも見える東洋喩言。

第五十一卷一八佛本行經、二羽の鳥と夫婦の話、一九又同經二頭の鳥の話、二〇僧祇律孔雀の話、及び狸に食はれる鶏の話。

第五十三卷三三の十誦律打蠱とあるは *Makasa Jataka* で、ロムルス集中にもあり、後 *Shraparola* (xiii. 4) にも傳はつてゐる。

賢愚經打蠅も同一話。僧祇律、五百獼猴救月の話、雜譬喻經、妬影の話、又十誦律、分衣の話。三四、百喩經造樓、磨刀賣香、賭餅畏婦、揀米、効昫、三五捕樹の話がある。

第五十四卷三五に雜譬喻經、萬物無一可信の話、同經の婆羅門、毒藥を和合する話、三六に智度論、二人の僧、鬼を覓める話、舊雜譬喻經、例の犬と影の話、三七に五分律、狩する師子の話、佛本行經、龜の話の闍多伽、續いて三八に猴の心臓の話、雜寶藏經、鳥梟合戰、六度集經孔雀王の話。

第六十四卷一一一、雜寶藏經、王子兄弟二人の話とこれに類似の數話。一一二、大集經、師子獼猴二子を守る話、一一三、善見律、帝釋、鳥の子を踐殺さむを恐れる話、一一四、唐奘法師行傳云、婆羅痾斯國內有列士池、池西有三獸塔とあつて、兔、火中に入る有名なる闍多伽。〔西域記〕京都文科大學本七ノ一四。

第七十一卷三九に智度論の一角仙人の話、第七十六卷六五に四分律の師子と虎、野干の爲に嗾されて戰ふ話。

第七十七卷六七に大莊嚴論路傍にある黄金を毒蛇と呼ぶ話があるが、これはビドバイ物語 (Bentley 244—7) に見えてゐる。第七十八卷七三には赤背鳥喙經、拘者といふ鳥と猴とが虵と争ふ話、雜譬喙經頭尾相争ふ虵の話が出てゐるが、後者は Midrash 喙言に全く同一の話があるので、腹と四肢の話と同型のものである。

第八十七卷二一、大莊嚴論盜賊臆中に手を入れる話。

第九十卷四〇、佛藏經、半ば鳥、半ば鼠の如き蝙蝠の話。

第九十一卷四八、百喙經、甘蔗の話。

第九十二卷五二に同じく百喙經、小兒を殺す婆羅門の話、又同經、妻の醜き鼻を治さうとした夫の話がある。

以上極めて忽卒なる調査ではあるが、如何に佛教文學が世

界文學と深い關係があるかの一端は、それだけでも解ると思ふ。而して日本の雜書中、梵漢傳來の分子はかなり多からうと信ずるが、まだよく研究して見ない。唯今昔物語などを通覽すると、天竺の部に勿論幾多の印度民俗傳説、或は佛教文學がある。

其卷二に佛說耶輸多羅宿業給語、波斯匿王娘金剛醜女語、摩竭提國王燼杭太子語、貧女現身成后語、卷三に舍衛國金天比丘語、舍衛城寶天比丘語、舍衛城金錢比丘語、舍衛城寶手比丘語、卷四に天竺人兄弟持金通山語、佛御弟子值田打翁語、卷五に僧伽羅五百商人共至羅刹國語、國王狩鹿入山娘被取獅子語、一角仙人疲負女人從山來王城語、國王入山狩鹿見鹿母夫人爲后語、三獸行菩薩道兔燒身語、獅子哀猿子割肉與鷲語、天竺國王依鼠獲

勝合戰語、身色九色鹿住山出河邊助人語、龜報人恩語、狐自稱獸王乘獅子死語、狐借虎威被責發菩提心語、舍衛國鼻缺猿供養帝釋語、龜不信鶴教落地破甲語、龜爲猿被謀語、林中盲象爲母致孝語、象足踏立株人令拔語、五百商人於大海值摩竭大魚語などが廣く民俗傳説、狹く喩言から觀察して一顧の價值がある。震旦の部にも卷十にある嫗毎日見卒都婆付血語は面白く、本朝の部には卷二十四、百濟川成飛彈工挑語の如き、雜譬喩經中に其出典とも言ふ可きものを所有してゐる。而して希臘の話 Apelles, Zeuxis の事は如何と考へると、傳説の起原通借等が或は容易に解釋し得る如く、或は忽ち疑惑に被れる如く、そこが研究者に興味を感じしめ、熱心を起させる。伊曾保物語の由来を尋ねて、遙々も歩いたものかな。東西古今に互る考證の

大綱はこれでざつと述べ了つたつもり、一々の喩言を比較し解剖する精細の討究は後日を待つ。

## 一九

これまでの考證は系圖様の表に示すのがもつとも便利だから、委細はA表に任せて、こゝに骨組だけを一纏にして言はう。

動物談は民俗傳説の一部で、太古人又未開人の活物説に起原し、世界中いづれの國民間にも發生する。而してもしこれを教訓、諧謔の具に用ゐる時は、動物譬喩談(或は喩言、笑話)が生じる。文化を有する國民中でこの文學上の一形式を十分に彫琢して、人口に膾炙するほど發達させたのは、東に印度と西

に希臘とであつた。希臘では紀元前六七世紀の頃、寓言を以て政論を行ひ、又諧謔に供すること流行して、終に凡べての喩言を一奴隸 *Aisôpos* の作に歸するに至り、紀元前三〇〇年の交、歴山府文庫の建立者 *Demetrius Phalerus* 伊曾保ぶり喩言約二百種を大成して *Logôn Aisôpeion Synagôgai* を編修したのが、第一の結集である。紀元一世紀、*Phaedrus* 之を羅甸の律語に翻譯して第二の結集が出来た。

印度に於ては夙に豊富なる動物譬喩談があつたのを、紀元前五世紀の頃、釋尊、これを假りて教化の具とした。之を闍多伽(本生經)或は阿波陀那(譬喩經)といふ。

然るに紀元前三世紀の頃なるか、闍多伽は、其原始形なる律語の伽陀(偈)と共に錫蘭に渡り、三百年を経て、紀元一世紀の中

葉、其中、約一百種の喩言、錫蘭の使節に齎されて、歴山府で譯されたやうだ。これ古代希臘羅馬に所謂利比亞喩言であらうか、*Kybiases* の作と傳へられた。後世の伊曾保物語の終にいつも所謂 *moral* (文祿舊譯の所謂、下心) が添へてあるのは、かの伽陀の蹤かとも思はれる。

其後、紀元二世紀の人 *Nicosstratos* デメトリウスの結集にキビセスの利比亞喩言を加へて一團とし第三結集 *Decamythia* を作つたが、今は傳はらない。三世紀に至つて、此第三結集喩言三百種を希臘の律語に書改めた者は *Babrinis*、更に亦四世紀に此中から重に利比亞喩言の部、四十二種を羅甸の律語に書改めた者は *Avianus* である。

中世を通じて伊曾保喩言はフ、イドルスを散文文化した數種

の集で傳はつた。而して其喩言總數は近世に及んで發見された律語のフ、イドルスより遙に多い。アキアヌスも亦同じく中世紀は散文化して傳はつた。バブリウスも亦同一の運命に遭遇して希臘の散文に書き更へられ其一部は宛も眞に伊曾保の自ら撰した喩言なる如くに今も思はれてゐる。

バブリウスの一部は、東洋の物語と合體して、其後亞刺比亞、斯利亞に渡つたやうであるが、十一二世紀の頃、再び歐羅巴に渡り來て、英人 Alfred の集となり、つゞいて Marie de France を介して大陸に流布した。

印刷術の發明あるや、一四八〇年、獨逸人 Heinrich Stainhövel 始めて伊曾保物語集を刊行した。此集の卷頭にはプラヌデエスの伊曾保傳を掲げ、次にロムルス集、次にマリイ集の喩言、次

にバブリウス、次にアキアヌス終に笑話數十種を收めた。さしにも紛糾錯雜した伊曾保喩言も、こゝにひとまづ綜合されて、近世伊曾保物語の源泉となる。喩言の研究者は、まづ此集より遡るを便とする。

古く古くと遡つて伊曾保物語の起原を尋ねたのは、宛も吉田兼好八歳の時「佛はいかなるものにか候ふらむ」と父に問ひ「第一の佛は、いかなる佛にか候ひける」と終に迫つた語のやうであるが、これは「空よりや降りけむ、土よりや湧きけむ」と反らすには及ばぬ。動物譬喩談は民俗説話の一種である、東洋或は西洋の專有物で無く、汎く人間の心理状態から發生したものと斷言される。

(完)

(明治四十三年十一月二十七日講演)

福水 *Ganga* が答へる條であるが、これに似た話ともう一つ印度にある。 *Calnali* といふ雪山の大樹、大言して風神 *Pavana* を罵り、其夜悔いて、悉く己が枝を除き幹のみを残したところ、翌朝風神之を見て大に笑ふといふのである。 第一八の腹と四肢の話も摩訶婆羅多にあるが、これだけで直ぐ此話の印度起源は定められない。 なるほど、これは *Upanishad*, *Zend Yagna*, *Pan-catantra* 等にも在るから、東洋の起原らしくあり、且つは阿波陀那の中、例へば漢譯雜譬喻經地頭尾共諍喻にさへ類話が出てゐる。 然し *Maspero* の發見した紀元前三世紀の紙葉中パピルスにある古代埃及の腹と頭の問答デバタあるを如何にせむ。 プルウタルヒオスのコリオラヌス傳、リキウスの羅馬史にある同一の話も、してみると東洋から傳はつたので無く、獨立に發生したとも

思へる。類話と言つて直ぐに通借があつたと断定する事の危険はこれで解らう。

さてこゝで一步退いて、上に挙げたビドパイ文學の中生元層に立歸り、類似の最も甚しい話を調べて見よう。『五部書』編修の年代から考へて、これらの類似のみで、印度起原説を唱へる事の不可能は既に説いた如くであるが、既にその前、古くから闍多伽、阿波陀那中に他の類話がある事實から推測すると、中生元層中の或るビドパイ物語も、實は闍多伽と同じやうに古くはあるまいかと、信じられて來る。著るしい類話の數種を前の番號に續けて下に記す。

一九 師子と鼠 Benley ii. 208-10.

二〇 善人と蛇 Benley ii. 244-7.

一一 狐と鹿 Benfey §181.

一二 二つの瓶 Benfey ii. 215.

二三 猫に形を變へる娘 Benfey ii. 262-6.

以上の考證はヘンフイの大著に始つて、幾多の學者に討究せられたのを Joseph Jacobs が一括して見せた決論に基いてゐる。而してかゝる前提の出た曉是等の類話について印度と希臘と孰れが原であると定めたいが、學者に依つて説が違ふ。不思議にも A. Wagener (*Mémoire sur les rapports des apologues de l'Inde et de la Grèce*, Bruxelles, 1854) O. Keller (*Untersuchungen über die Geschichte d. griech. Fabel*, Leipzig, 1862) のやうな希臘學者は印度起原を主張し、A. Weber (*Indische Studien*. III. 327-72) の如き印度學者は希臘起原を固執した。ヘンフイも亦多くの場合、希臘説に傾い

てゐたが、それはまだ諸種の材料が揃はなかつて、闍多伽の古いことも未だ知れず、而もバブリウス集が、實際よりも古く思はれてゐた當時の知識に據つた爲であつて、若しベンフイが今日居たならば、或は反對に印度説へ傾いたらうと思はれる節もある。

文獻の年代から推しても、喩言の内容から考へても、上に示した闍多伽、阿波陀那、摩訶婆羅多、五部書、嘉訓等に見える伊曾保喩言集の類話二十三種ばかりの中、とりわけ殊に闍多伽のみにある十四種は、印度から何等かの媒介によつて、希臘へ傳はつたものと推定して、大差はあるまい。然し Rhys Davids の如く殆ど凡ての希臘喩言が印度に發したと結論するのは間違だ。氏は所謂希臘散文喩言集を以て伊曾保物語の本體と